

木と左官の家

～右官と左官の手仕事で故郷と風土を懐う～
設計手法

住宅地の並び、建物の佇まいと階段の要望から階高は設定。兵庫県の製材所と生産した杉厚床を採用。暮らしに取り入れる素材は木と左官材料、自然物を基本とした。また、家族がそれぞれの地域で縁を結んでおり、神戸市以外の地域で暮らしていた故郷の思い出を新居でも感じてほしいと感じた。風土ではなく、思い出としての地域材も活用した。神奈川県藤沢市では、長女が子供の頃から浜辺で集めたシーガラスを天板に使い、カナリヤ石の研ぎ出しと漆喰磨きで、湘南の浜辺をデザイン。西日が差した一瞬でシーガラスが光る。外壁は淡路の真砂土をリジン配合、出隅をRに掻き落として仕上げた。京都府の次女はエイジング加工木材を希望された。話の中で古材好きがわかり、共に古材を探しに行った。次女の暮らす和室は障子戸と照明、床板に古材を使い、壁は重楽土、竿縁天井で仕上げた。障子戸を開ければ、吹抜から隣地の植栽を望む視線を、板戸で覆えば薄明かりの落ち着いた空間となるようデザインした。神戸市垂水区の長男は、地域材の1つ、林業再生を目指す屋久島町の取り組みを聞かれ、ぜひ活用したいと島内で加工まで行う林産地の森作りにお金が残る屋久島地杉ヤクイタを採用した。夫婦の寝室は、稚内で取れた珪藻土を採用した。メソポアという孔径で人に適した湿度を保つ。台所はタデラクト（モロッコ漆喰）仕上げ、石鹸で磨く事で独特の艶が出て、間接照明に照らされた壁は黄金に輝く。ペレットストーブの裏には、版築を塗りで再現。版築の横のラインと建具の縦ラインの間にはマス格子建具を敢えて横勝ちで採用した。基本壁に採用した漆喰もいくつかの仕上げを変えて採用した。



